

難民のために、難民とともに

www.japanforunhcr.org

With You

JAPAN FOR



UNHCR

国連UNHCR協会

国連UNHCR協会ニュースレター「ウィズ・ユー」

2019年10月 | 第42号



特集

国境を越えた子どもたちのことば

特別インタビュー：映画監督 山田洋次さん

「どうして自分が生き残ったのだろう……。ほかの人は死んでしまったのに」

国境を越えた子どもたちのことば

難民という境遇を生きる子どもたちの日々を、その等身大のことばでお伝えいたします。

「私は旅行に行けることに、とても興奮していました」

後にUNHCRの職員となるモニク・ソクハンは、このとき6歳。紛争の影が忍び寄るカンボジア(※)で、母親が極秘に手に入れた2通のパスポートは、父親とモニクのもので、彼女はまだ、これが母親と姉との別れになることを知りませんでした。国境を越えた子どもたちの直面する試練を、モニクのことばを通してお伝えします。

※1970年代、クメール・ルージュの政権下で200万人近くが命を落とした

「何が起きているの？
お姉ちゃんはどこにいるの？」

モニクの母が、家族を守るために国を離れると決めたのは、モニクを連れて姉を学校に迎えに行ったある日のことでした。目の前の建物が爆破。「皆、悲鳴をあげていました。私は母にたずねました。『何が起きているの？』と」。幸運なことに、そこは姉の学校ではありませんでした。すぐに2通のパスポートを手に入れた一家の計画は、父とモニクが先に出国するというもの。当時の心境をモニクはこう振り返ります。「父と仲がよかったので、とても気楽でした」。このように、何が起きているのかもよくわからないほどに幼い子どもが国境を越え、難民になっています。



「私は泣きました。
私には、誰もいませんでした」

父親が仕事を探す間、モニクはフランス人の家族に預けられることになり、言葉もわからないまま現地の学校に通うことになります。「私は泣きました。ほかの子どもも泣いていましたが、彼らには母親がいます。両親がいます。でも私には誰もいません。だから難しかったのです。泣き叫んでいた私は、そこからつまみ出されるほかありませんでした」。

「それは、人生でもっとも
幸せな瞬間のひとつです」

「うれしくて叫びました」。久しぶりにおてんばなモニクが顔を出した瞬間でした。母と姉とのフランスでの再会。それは、母国を後にしてから半年後のことでした。小さな家で家族一緒にの生活が始まり、モニクは学ぶことに専念しフランス語も習得。「両親に、私のことを自慢に思っほしかったのです」。その思いの裏には、母国からの悲しい知らせがありました。親戚の多くが、命を落としたのです。「子どものとき、泣いている親を見るのはつらいものです」。モニクは、肉親の死に心を痛めながらも自分たちが学べるようにできる限りのことをしてくれる両親を、元気づけたかったに違いありません。



「命を落とした人々のために、
私には責任がある」

心の中で生き続ける大切な人に、胸を張れる自分でいたい。モニクはそう思い続けてきました。それは、カンボジアでの幸せな日々の中で、姉妹の面倒をよく見てくれた年上のいとこです。「彼は殺されました。どのように殺され、どこに遺体があったのかもわかりません。思い浮かぶのは、彼の笑顔です。それはとても大切なものです」。やっと絞り出すようにモニクは言います。そして時おり苛まれるある感情。「どうして自分が生き残ったのだろう……。ほかの人は死んでしまったのに」。でも、彼女は再び前を向くのです。紛争で影響を受けたすべての人を思っ。「命を落とした人々のために、私には責任があります。彼らが誇りに思うような人間になるという」。



その思いがきっかけとなり、モニクは難民のために働くことを決意します。いつか母国に戻るという思いを持ち続け、大学卒業後、国を立て直すためにカンボジアへ。そこでUNHCRに入り、タイへ渡ったモニクが、最初に援助活動にあたった人たちとは……。


[続きは
www.japanforunhcr.org/jp/monique](https://www.japanforunhcr.org/jp/monique)

 (インタビュー全文)をご覧ください。

ロヒンギャの子どもたちと心のケア

「僕たちは助けを求めることを“弱さ”だと思って、
自分の気持ちを隠そうとしていたんだ」

アブドゥル(16歳)



子どもたちは、目撃しました。命を奪われる家族の姿や燃えさかる炎に包まれる家々……。到底受け止めることのできない、おぞましい光景の数々を。ミャンマーからバングラデシュに逃れているロヒンギャの子どもたちは50万人以上。同地に逃れている人々の半数以上にのぼります。支援の現場では、過酷な経験による心の傷が深刻な精神疾患へとつながらないよう、子どもたちの心のケアを模索しています。

「夜になると、お父さんがそばにいる気がするんだ。
ちゃんと学校に行っているか、確認しにくるんだよ」

アブドゥル(16歳)が、こうして亡くなった父親のことを話せるようになったのは、実は最近のこと。きっかけは、UNHCRが運営する心のケアのプログラムにあります。20人ほどの子どもたちが、ダンスや運動、質問タイムなどを通じて、避難先で感じている不安や寂しさを共有するプログラムは、問題を抱えたまま心を閉ざすことなく、心の中にある不満や悲しみを受け入れられるようになることを目的としています。さまざまなアクティビティを通して自分の気持ちを素直に表現するこのプログラムは、声に出して助けを求めること自体、弱く恥ずべきこととみなされることもあるロヒンギャの人々の慣習をふまえると革新的な内容です。また特筆すべきは、子どもたちのリーダーがセッションを主体的に引っ張っていることです。「僕たちは助けを求めることを“弱さ”だと思って、自分の気持ちを隠そうとしていたんだ」と、

ロヒンギャ難民の心のケアとUNHCR

2017年の大規模な流入以前からバングラデシュでロヒンギャの人々の心理的ケアを行ってきたUNHCRは、膨大なニーズに伴いそのサポートを拡大。2017年の流入直後は、緊急心理ケアにもあたってきました。現在、心理的ケアを通常の医療システムに組み込んでいくことにも注力しています。またUNHCRのメンタルケアの専門家は、パートナー団体や政府のサポートをはじめ関係各所能力強化も担当しています。

リーダーのアブドゥル。難民自身が主体的に参加し、経験の共有に焦点を当てたプログラムは、ミャンマーから他国に逃れたほかの民族の心のケアにおいても良い結果が得られていることから、ロヒンギャ難民の子どもたちの心にもプラスの影響をもたらすことが期待されます。



開始当初、たった2グループだった心のケアプログラムの参加者は、現在40グループを数えます。1グループにつき2人のリーダーがセッションを展開し、重要なポイントを説明するなどリーダーシップを発揮。子どもたちが周りとう交流し自分の能力を伸ばしていく場としても機能しています。リーダーの少女の一人ミシャラ(13歳)は言います。「誰かに手を差し伸べられることは大きな喜びです」。

ロヒンギャの文化と心のケア

ロヒンギャの人々のことばには、うつ病やPTSD(心的外傷後ストレス障がい)に相当する用語がありません。このような西洋的なメンタルヘルスの概念やカウンセリングなどになじみがないこと、精神疾患が恥ずべきものとみなされる慣習などが、心理的ケアを提供するうえでの障壁になっています。そのため、ロヒンギャの人々の文化的背景をふまえたうえで心理的ケアを模索していくことは重要な課題の一つです。

勉強したい!

学校に行き、友達と机を並べて学ぶこと。その日々の尊さを、ある日「ふつうの毎日」を失った子どもたちは知っています。各国政府やホストコミュニティの協力を得て、学びの場にもう一度戻ってきた子どもたちの喜びの声と決意をお伝えします。そして、その教育現場が今なお直面している課題とは。

「唯一の武器、それは教育です」ノウサ(16歳)



© UNHCR / Rima Chel

南スーダンの紛争が激化し、父親が行方不明になったのはノウサが13歳のときでした。母と兄妹とエジプトに避難し、UNHCRの事務所で難民登録を済ませ、やっと学校に通えるようになりました。カイロには、UNHCRとパートナー団体の支援を受けた学校が70校以上あります。ノウサの夢はいつか教師になること。「国に戻ったら、頼れるものが何もない人たちを助けたい。私と同じ思いを、誰一人してほしくないから」。

子どもたちが将来自立し、地域に貢献できる人材に成長するためには、高等教育の機会の拡大が不可欠です。27年前にドイツ政府とUNHCRが立ち上げた高等教育の奨学金制度DAFIや日本に住む難民の若者を対象にしたUNHCR難民高等教育プログラムなどにより、高等教育の機会は少しずつ増加。しかし、その数はいまだ全体の3%にすぎません。

高等教育の就学率

世界

37%



難民の若者

3%

出典: UNESCO(2017)、UNHCR(2018)



© UNHCR / Georgina Goodwin

「テストが終わるまで、どうか雨が降りませんように」イラホゼ(14歳)

タンザニアのンドウタ難民キャンプで、雨にも負けず、風にも負けず学んでいるブルンジ難民の一人イラホゼ。このキャンプでは学校の設備が整っていないため、7割の子どもは野外で勉強しています。「雨が降ると、

元氣よく手を挙げるのは、シリア難民のカマラ(10歳)。ドイツの小さな村ゴルツォウに、彼女は自分の居場所を見つけています。深刻な過疎化に悩まされていた村の人口は835人にまで減少。生徒の数が足りず、地元の学校は閉校の危機にありました。そんななか、町長の発案で自治体が子どものいる難民の家族の移住者を募集。難民の家族は受け入れ先を見つけ、学校側も十分な数の生徒を確保できました。win-winとは、まさにこのこと。カマラは言います。「みんな、私たちのことを知りたくて、私もみんなのことを知りたいの。伝えたいことはたくさん。だから、アラビア語かドイツ語で教えてあげるの」。

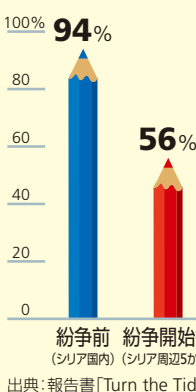
「みんな、私たちのことを知りたくて、私もみんなのことを知りたいの」カマラ(10歳)



© UNICEF / Gordon Weidner

シリアの紛争は、紛争がいかに子どもから教育の機会を奪うかを物語っています。紛争前の2009年、シリアの小中学校の就学率は94%でしたが、紛争開始後の2017年、避難先の周辺国では56%まで減少(初・中等教育)。UNHCRは周辺国で教育支援を続けていますが、避難先の教育システムからこぼれ落ちてしまう子どもも多く、学びの場に戻ってこられるようなサポートなど、細やかな支援が必要です。

シリアの子どもの就学率



全部びしょぬれだよ。風が吹いたら枝が落ちてきて、紙は飛んでっちゃうし。日差しが強すぎる日は、暑すぎて授業は中断しちゃうんだ」。そして、数学のテストを受けながら雲行きが怪しくなると、こう祈るのです。「終わるまで、どうか雨が降りませんように」。

難民の子どものうち、初等教育を受けているのは3人中2人未満、中等教育になるとその数は4人中1人未満に。空腹と戦いながら授業を受ける子ども、貧困にあえぐ家族を支えるために働き手の役割を求められ、学校に通えなくなる子どもも多く、国際社会からの教育支援が依然として必要です。

子どもたちと新しいことば

「最初は、はじめて見る世界に目を見開く子どもみたいです。でも今は、自分の国のことばのように感じています」

習得しつつある新しいことばについて話すのは、欧州に逃れたシリア難民のナタリア。たどり着いた国で、周囲と共存し生きていくための鍵、新しいことばの習得。子どもたちや若者は、どのように奮闘しているのでしょうか。ヨーロッパで最多、約110万人の難民を受け入れるドイツで難民の学生にドイツ語を教える教師の方に、お話を伺いました。

難民の子どもたちは、ドイツでどのような環境でことばを習得しているのでしょうか?

普通の学校に併設されている準備コースでドイツ語を中心に学び、ドイツ語が通常学級に入れるレベルに達した時点で、ドイツ人と同じクラスに移るのが一般的です。子どもは語学の習得も早いので、仕組みとしてはよくできていると思いますが、まだ改善点もあります。実践の場では、子どもたちが抱えている言語面の難しさへの配慮が鍵になります。たとえば、算数の文章題が苦手な子どもがいたときに、できない子と決めつけるか、ドイツ語の理解が十分でない現状で、どう説明すれば理解できるだろうと考えるかの違いは大きいです。教員は、上級レベルの語彙を無意識のうちに使ってしまうことも少なくないですから。ドイツ語の教師不足の問題などもありますが、ことばの能力で授業の理解の度合いが変わってくるので、子どもたちが確実にドイツ語を身に付けられる環境を整えていく努力が必要だと思います。

学校ではもちろん、ドイツは書類社会というか、暮らすのにたくさんの文章を理解し書くことが求められる印象です。

私がおもに教えている大学進学を目指す難民の若い子たちには、特にそういう能力が求められます。実際に、文章の作成ですごく苦労しています。母国での語学学習において書くことが重要視されていなかったことに加えて、時代的なものもあると思います。たとえば、スマホの予測変換にすごく慣れている世代ですよね。だから、自分の手で文章を書くことに慣れていないのです。でも大学に入学する資格を得るドイツ語の試験では、かなりの量を直筆で書くことを求められます。だから「毎日、手で文章を書きなさい」と、徹底的に伝えるようにしています。それに比べると話す方の上達は早いです。大学生と一緒に日用品の買い物やパーティーに行くプログラムもあって、参加した生徒たちは、ドイツの若者みたいにすごく上手に話せるようになっていました。

大学入学を目指す難民の生徒にドイツ語を教えるとき、どのような点に注意していますか?

先ほども例に挙げた通り、大学に入るなら、ある程度の量の文章をきちんと書ける能力が必要なわけで、そこに向けて、どう

学ぶか、というテクニク的なことも大切ですが、成功体験のある生徒とつながりをつくることも大切だと思っています。だから、すでに試験に受かった生徒を紹介します。何度も落ちて受かった人もいますけど、難しくても努力すれば受かることを同じように逃れてきた人から聞けるのは貴重ですから。

ドイツ語を勉強し始めるとき、みんなどういう反応をしますか?

はじめはすごく夢中になって吸収も早いです。でも、文法が始まるとショックを受けて。名詞の性の問題にも直面します(ドイツ語の名詞は男性、女性、中性名詞の3種類)。「なんで3種類も必要なの?」「どうしてアラビア語でBaum(木)は女性名詞なのにドイツ語では男性名詞なの?」とかこんな具合に。「あんまりだ。覚えることがありすぎる!」って(笑)。

難民のためのカリキュラムはあるのですか?

カリキュラムはありませんが、難民向けの教科書はあって、役所や病院での会話やドイツの文化、歴史、地域性などがテーマです。一部の話題を取り扱わないのも特徴で、私はそれが気になるのでその教科書は使わないのです。自由にものを言える国に来たんだから、どんなテーマでも扱って、「みんなここは自由だから。だからもし話したくなければ、それは話したくないって言えばいいから」って言うんです。みんな本当は、逃れてきた経験を話したいと思っています。タブーへの恐怖は難民とドイツ人の両方にあって、ドイツ人は聞いたら失礼になると思っていて、一方難民は、そういう話は人を嫌な気持ちにさせるかもしれないと思ってタブーが生まれているんです。



そういう部分、もっと気兼ねなく話せるようになるといいですよ。ドイツ語と日々奮闘する子どもや若者へのサポートで、もっと必要だと思う部分はありますか?

言語教育の現場でも、逃れてきた人たちの文化を理解し尊重する環境をもっと用意しなければならないと思います。私の生徒はシリア人が多いのですが、ラマダン(※)がすごく暑い時期だったときがあって。教室も試験会場もエアコンがなくて、本当に大変そうでした。今回は見送って次回受けければいいとか、そういうことではないと思うんです。ドイツは今、人口の約4人に1人が他国に何らかのルーツがあるといわれています。親友がイランの方と結婚して、14歳の娘がいるのですが、クラスで「多文化のバックグラウンドがあるのはクールだ」って話してると言っていました。国全体で内向きの傾向も見られますが、都市部では社会の考え方が少しずつ変わってきています。難民の子どもたちがことばを習得し、どのようにドイツ社会になじんでいくのかという面ではまだ課題が山積みですが、そういう部分に希望を感じています。

※イスラム教徒にとっての聖なる月。30日間、日の出から日の入りまで断食し、苦しい体験を分かち合うことで貧しい境遇にある人々の気持ちに寄り添う

© UNHCR / Michael Neovius

特別インタビュー 映画監督 山田洋次さん

山田洋次監督(左)と事務局長・星野 守(右)

難民は深い絶望の中に生きている。なんで生まれて来たんだろうと。そういうところに寅みたいな人間がいたら、どんなにみんな救われるか。

山田さんは、戦後食うや食わずの生活で、行商や炭鉱の坑木運搬などの重労働や進駐軍の使役などに従事していました。そんな辛いとき、皆を笑わせてくれる人がいたそうです。その人のおかげで、どれだけ気持ちが救われたかと山田さんは言います。やがて東大法学部を卒業して松竹に入社し、映画製作の道へ。1968年夏、山田さんと渥美 清さんの出会いから『男はつらいよ』の主人公、車 寅次郎が誕生しますが、寅さんの原型にはそんなご自身の体験もあったのです。

今年末に公開される新作映画『男はつらいよ お帰り 寅さん』のマドンナはなんとUNHCR職員。どうして山田さんはマドンナをUNHCR職員にしてくださったのか。山田さんが難民に対して寄せる思いなど、事務局長・星野がお話を伺いました。

—— 新作映画『男はつらいよ お帰り 寅さん』でどうしてマドンナをUNHCR職員にしてくださったのですか？

寅さんの甥の満男と初恋の人の泉の再会から物語が始まるのですが、泉役の後藤久美子さんは現実にはフランスの人と結婚し、ジュネーブに暮らしている人。だから役の上の泉も海外に暮らしていて、日本に帰国するほうが自然ではないかと思いました。たまたま仕事で日本に来て、滞在期間も限られているという設定の上ではどういう仕事がいいか、考えているうち、国連の人道機関のUNHCRが浮かびました。今、世界で大きな問題になっている難民問題という、危険もあるような、しかし大切な仕事に真剣に携わっている女性にすればいいんじゃないか。そういうことで決めました。

—— 山田さんはお父様の仕事の関係で幼少期を満州で過ごし、14歳のときに敗戦を現地で迎えられた。その後、引揚げでも大変ご苦労された。そういったご自身の体験が、難民への思いにつながっているのでしょうか。

敗戦で、満州、中国大陆から何十万という日本人が引揚げてきました。言葉では表せない悲惨な目にあって、引揚げの途中でたくさん人が死んでいきました。

難民の写真を見て僕が連想するのは、「さあこれから家を出よう」というときにどんな思いをするのかということ。たくさん家財道具があるわけじゃなくても、家族で集まって何を持っていか話し合う。担げる分しか持っていけないから。その経験は僕も引揚げのときにしてるんです。中学生の僕は大事にしていた落語全集を持っていこうとして、親父に叱られましてね。重い本など持っていくな、まずは食糧が大切、その次に大事なものをリュックに背負えるだけ選ばなくてはいけないということで、毎晩毎晩、家族で相談しました。



難民の写真パネルを熱心に見入る山田監督(右)



イズミ・ブルーナ役の後藤久美子さん(中央)と山田監督(右)

3月のある日、荷物を担いで家族で家を出ました。家の中に本がたくさん残っていて、あの本どうなっちゃうんだろう、中国の人たちに日本語の本は読めないから、みんな焚き付けになるのかなあと思ったりしながら歩いていて、ひょいと振り返ったら、中国の貧しい少年たちが集まって、ウワーツと一斉に家から荷物を奪い出すのが見えてとても悲しかった。そういう、難民っぽい経験はあるもんですから、他人ごとじゃないんだ、といつも自分に言い聞かせながら、難民の報道を見たリ読んだりしています。

(避難する難民の写真を指して)あの荷物どうやってひとつひとつ選んだんだろうなあ。涙ながらに置いていった品物もたくさんあるんだろうなあ。1軒の家か、ひとつの部屋に住んでるわけですから、いっぱいあったはずですよ、色んなものがねえ。たくさん捨てて、大事なもののだけを持って歩いているんでしょうね。途中でくたびれて捨てたりしたんじゃないか。これで何日も歩いたらもちませんよ。布団まで持ってるんだもんなあ…。

—— 寅さんが難民のもとに行ったら、どうだったでしょう。

48作目の製作中に阪神淡路大震災がありました。大きな被害を受けた神戸市・長田区の人たちが僕にどうしても会いたい、何人かで来られまして。寅さんのロケーションを長田でやってくれないかと。僕はびっくりして「寅さんのようなふざけた人間が、たくさんの人が亡くなった長田のような土地に行ったら『何ができる。ふざけるな』って叱られるんじゃないですか」って言ったら、長田の方々が「逆ですよ」と仰るんです。「皆笑いたいです。寅さんが来て、ワーッと陽気に騒いで

皆を笑わせてくれることをむしろ期待します。ロケ隊が来て下さるだけでとっても嬉しいんです」と。調べてみると、普段は役所や町内会といった組織や秩序の中で人々が暮らしているところが、震災にあうとその秩序がめちゃくちゃになってしまう。そういうときには真のような、もともと組織とか秩序というものが理解できない男が、意外に役に立つんじゃないかと。「おじさんこうしよう」「おばさんあっち行って頼んで来い」「市役所のおじさん、ぼんやり突っ立ってないでこういうことやれよ」とか、寅はとても役に立つんじゃないかと思ひましてね。

じゃ、寅と一緒に被災したと考えよう、ボランティア活動を生懸命やってた。だけど暮らしが落ち着いてきて、市役所が機能を回復してくると、寅がうとましい人間になって(笑)。「俺はそろそろ邪魔になってきたな」、ある日しょんぼり「みんな幸せになれよ」と言って去っていくんじゃないか、そう考えて「じゃ、寅さんを長田に行かせましょう」ということになりました。

難民は深い絶望の中に生きてるんですからね。なんで生まれて来たんだろう、なんで生きているんだろうと思う人がたくさんいるでしょうね、きっと。そういうところに寅みたいな人間がいたら、どんなにかみんな救われるかと思ひます。

—— 日本のUNHCR支援者へのメッセージをお願いします。

僕たち日本人は、世界を見なくなってきている。自分の国、自分の家族さえ幸せならいいんじゃないかという考え方は人間として間違っていると思います。もっと外に目を向ける。自分の周りにどんな人たちがどんな暮らしをしているか、どんな苦勞をしているか。世界でいちばん苦勞してるのは難民の人たち。食うや食わず、炎天下にテント暮らしを強いられて。この人たちがいつ故郷に戻れるのか、あるいは新しい生活に希望が見えるのか。それがどんなに大変か。難民のために何ができるかってことを、真剣に考えるような日本人であってほしいと思います。

取材:2019年8月1日 東京・国連UNHCR協会



インタビュー拡大版はウェブで公開中です
<https://www.japanforunhcr.org/archives/torasan>

Photo by『男はつらいよ お帰り 寅さん』©2019 松竹株式会社(※を除く)

映画『男はつらいよ お帰り 寅さん』にイズミ・ブルーナUNHCR職員が登場



©2019 松竹株式会社

今ぼくたちは幸せだろうか。
君たちはどう生きるか ——

車 寅次郎の甥・満男と、満男がかつて思いを寄せた泉のその後の物語。別々の人生を生きてきた二人を軸に、さくらや博、そしてくるまやを囲む人々を描く。



©2019 松竹株式会社

【イズミ・ブルーナ(旧作では 及川 泉)】
後藤久美子

満男の初恋相手。一度は結婚の約束までしたこともあったが、両親の離婚後オランダへ。難民問題に興味を持ち、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)職員に。既婚で二人の子どももいる。仕事で来日し、思いがけず満男との再会を果たす。

2019年12月27日(金) 全国ロードショー 映画公式サイト tora-san.jp/movie50/

今号の表紙



ポーランド国境にほど近いドイツの小さな村に移り住んだシリア難民のカマラ。表紙と4ページの異なる授業で撮られた2枚の写真ですが、どちらも勢よく手を挙げて積極的に授業に参加している様子が伝わってきます。

メールニュース／SNSで最新情報をお届けしています
●メールニュースのご登録はお済みですか？

国連UNHCR協会 メールニュース 検索
ホームページから登録できます。

Twitter Facebook LINE YouTube
国連UNHCR協会 SNS 検索

小池克憲プロフィール

UNHCR駐日事務所でのインターン後、2007年より難民支援協会職員として援助の実務に携わる。2011年からUNHCRに所属。ケニア・カクマキャンプ事務所、タイ・バンコク事務所を経て、2016年9月から2019年6月まで保護官として南スーダン・ジャムジャン事務所勤務。イダ難民居住地の保護活動を担当。

WithYou

国連UNHCR協会ニュースレター
「ウィズ・ユー」
第42号 | 2019年10月

発行
特定非営利活動法人 国連UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所・日本委員会]
〒107-0062
東京都港区南青山6-10-11
ウェスレーセンター3F
Tel.0120-540-732
Fax.03-3499-2273
www.japanforunhcr.org

編集
国連UNHCR協会

デザイン
NDCグラフィックス

印刷
凸版印刷株式会社

©Japan for UNHCR
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

決してあきらめることなく、何度も同じ不満を繰り返すスーダン難民の人々。だけど、私たちも一歩も引くわけにはいかない。難民の方たちとのこのような本気のやりとりが、私が南スーダンで活動している2年以上の間、ずっと続きました。

——人々が不満を訴えるその訳は、スーダン国境近くのイダ難民居住地から70キロほど離れた難民キャンプに難民たちを移動させるという、南スーダン政府およびUNHCRの方針にあります。イダ居住地は、2011年に勃発した内戦によりスーダンから南スーダンに逃れてきた人々によって自発的に形成されました。難民たちの所有する故郷の土地やコミュニティへの思いは強く、いまだ紛争が終結していないにもかかわらず、多くの人は避難先の南スーダンと母国であるスーダンとの間を頻繁に行き来します。そのため国境に近いイダ居住地の立地はとても重要です。しかし、遠くの難民キャンプに移れば、今ほど簡単には国に戻ることができなくなります。

人々が保護環境の整った別のキャンプに移らなければならなくなった背景には、イダの安全保障上の問題があります。居住地から故郷にアクセスしやすいということはその逆もあり、例えば反スーダン政府軍がイダ居住地に来て難民の男性や子どもの徴兵を行うという事態が、2016年まで毎年起きていました。そのためUNHCRと南スーダン政府は人々を保護する環境に適していないイダ居住地を閉鎖し、同地での支援の縮小と人々を70キロ先のキャンプで保護する計画を立てたのです。でもスーダン難民の方々は、たとえ危険が近くに潜んでいても故郷に近く住み慣れた場所に留まりたい人が大半で、イダで支援を続けてほしいのです。当然、話し合いは一筋縄にはいきません。国際保護の観点からすれば常識的な主張でも、そこに生まれ、生きてきた人々の思いとは食い違ふことがあるのだということを身をもって知りました。

From the Field

難民支援の現場から

20

小池克憲 こいけ・かつのり



イダ・レセプションセンターで同僚とともに

UNHCRの職員も難民コミュニティのリーダーたちも、頭ではお互いの理屈をわかっていても、話し合いはどこまでも平行線をたどる。その一方で、そんな事情を知らない子どもたちは私たちに人懐っこく接してくれて、

その屈託のなさを何度もありがたいと思いました。一緒に遊んだひとは、とてもいい思い出です。かといって、難民との関係が、政治的で、お互いの思惑が入り組んだやりとりだけだったかというところではなく、日々顔をつきあわせて話をするなかで、ある種の信頼なり関係性が生まれてくる。そこでは相互尊重に基づく、透明で、明確なコミュニケーションがとても重要になります。難民コミュニティのリーダーに「最も人道的なUNHCR職員だ」と言われたことは、今でもとても誇りに思っています。南スーダンでは、このように自分の知らない難民コミュニティ独自の

常識と出会うことが多くありました。難民キャンプには親を失ったり親と離れて暮らすスーダン難民の子どもが数千人いるのですが、多くは、親たちが故郷に戻っている間、キャンプにとどまっている、というケースです。その子どもたちが一人ぼっちで取り残されて、なすすべもないのかというところというわけではなく、親たちが託した親戚や知り合いが、当然のように子どもたちの面倒を見ているという光景があります。このようなセーフティネットが、コミュニティの結束が強いのために成り立っていることにも驚きました。「イダは危険だから、UNHCRはここで支援を続けることはできない」「なぜスーダンから近いイダで支援できないんだ」。スーダン難民の人々の支援の現場を思い出すとき、まさきによみがえるのは、頑ななまでに続いたこのようなやりとりです。難民の方たちがすごく大切にしていることと、難民保護の原則が食い違っていたということ。そこが本当に難しい部分でした。国際保護の基準や難民条約に沿って難民の人々を保護することは、もちろん大切だと思います。でも同時に、大切なのはそれだけではないとも感じています。同じくらい、もしくはそれ以上に大切なのは、「難民の人たちにとって最善の策は何なのか？」ということを考え続けること、そして難民という境遇にある人々と話し合い、答えを模索していくことではないかと思うのです。

